

異常気象に強い米づくり

令和2年10月1日

次年度産の開始は

「土づくり」から!

長岡農業普及指導センター  
稲作情報 No.8

電話 0258-38-2554

E-mail ngt111440@pref.niigata.lg.jp

- 1 稲わらは10月中旬までにすき込みましょう。
- 2 粃がらはケイ酸質資材としてほ場にすき込みましょう。

## 1 稲わらの秋すき込みで土づくり

- (1) 稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の土づくり効果が期待できる。  
また、春すき込みに比べて、ワキの軽減が期待できる。
- (2) 地温が15℃以上で稲わらの分解は促進されるため、収穫後できる限り早く（10月中旬までに）すき込みを行い、分解を促す。
- (3) 土壤微生物に酸素が供給されて稲わらが分解されやすくなるように、耕深は5～10cm程度の浅うちとし、稲わらと土壤を混和する。
- (4) 湿田や冬期に水がたまりやすいほ場では、排水溝を作り、表面水の排除に努める。
- (5) 土壤中のケイ酸、リン酸の量はほ場間差が大きく、中には不足しているほ場がある。各ほ場の土壤実態に即した土づくり肥料の施用と、稲わら秋すき込みを行い、効果的・経済的な土づくりに努める。

## 2 粃がら施用でケイ酸供給

- (1) 粃がらはケイ酸を約20%含む有用資源である。収量540kg/10aのほ場から得られる粃がら（約135kg/10a）をすべてほ場に戻すと、ケイカルを80～100kg/10a散布したのと同様の効果が期待できるので、「各ほ場から得られた粃がら量」を施用する。また、土壤を膨軟化する効果もある。
- (2) ただし、ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の粃がらは、伝染源となる可能性があるため施用しない。また、雑草種子が多量に混入したものも施用しない。

安全への高い意識をもって作業を行い、農作業事故の発生を防止しましょう。